

翻刻『兵庫築島伝』その五

森 田 雅 也
高 瀬 万 人

本稿は、関西学院大学図書館蔵『兵庫築島伝』巻五の翻刻である。書誌及び凡例は先の四号（『日本文藝研究』第五十七卷二号、同三号、同四号、第五十八卷一号）と同様であるが、利用の便を考慮し、凡例のみ再掲する。

【凡例】

- (1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
- (2) 漢文の返り点、白丸「」は原文に従い、連字符については省略した。
- (3) 翻刻本文中の片仮名、平仮名は、原文の表記に従った。
- (4) 合字はすべて現在通行の文字に改めた。
- (5) 丁の変わり目を、丁数をアラビア数字にて、表裏は片仮名語頭の一字にて（1オ）ように示した。
- (6) 挿絵は、底本を撮影し、挿入した。
- (7) 明らかに誤字・誤刻と思われる箇所については、下に（ママ）と付記した。
- (8) 漢字に濁点が付されている場合には、振り仮名の形で（ ）と示した。
- (9) 仮名として読める漢字も原文のままとし、振り仮名の形で（ ）で括って仮名を振った。但し、振り仮名において用いられている場合は、その限り

ではない。

(10) 振り仮名や仮名遣い、反復記号(「、」「く」)など、仮名の清濁は、底本のままとした。

(11) 序文にある印字も現行の字体に改め、翻刻した。

【翻刻】

兵庫築島伝巻五

目録

松王児童人柱 沈 并兵庫 築島成就

経島山来迎寺 縁由并福原 新都怪異

清盛焼 南都三井寺 并東北 諸源氏蜂起

清盛入道死 熱病 并隠戸駭水通船論

已上

兵庫築島伝巻五

吞一叟釈円信著

松王児童人柱 沈 并兵庫 築島成就

○応保三年七月十三日ハ。築島アルヘシトテ経石ヲ船ニツミテ兵庫ノ浦ヘン運ビケル。兼テ用意ノ事ナレハ阿倍権之允安氏数多ノ御幣ヲキリタテ、竜神納受ノ願文ヲ認メケル。頓テ船ニ乗テ遥ノ沖ヘノリ出ス。松王ハ三十人ノ命ニ代ントテ。早天ヨリ沐浴シテ白キ衣服ヲ着シ白キ直衣ヲキテ。支度アリシ石ノ櫃ニ入。見ル人悲傷セサルハナシ。阿波民部重能承リテ石櫃ヲ船ニノセ。幣帛ヲタテ、コレモ遥ニ漕出ス。此時叡山ヨリ觀如律師ヲ請待シテ。千人ノ僧ヲアツメ渚ニ居並ヒ御経

(一オ)

(目オ)

読誦シ玉フ沖ニハ音楽管絃ノ船ヲナラヘ。嚴重ナルコト云ンカタナシ。時ニ築島ヲ見物セントテ天王ヲ始メ奉リ。百官百司各々冠ヲカタフケテ御覽アル。行幸ノ御供ニハ。藏頭信基。讚岐中将時実。左中将清経。丹後

(目ウ)

空白

侍從忠房。左馬頭行盛。等ナリ。平相国入道淨海モ一門ノ公卿ヲ召ツレ玉ヒ渚ニヒカヘテ折念アル。平中納言教盛。新中納言知盛。修理太夫經盛。右衛門督清宗。本三位中将重衡。越前三位通盛等入道ノ左右ニ在テ御覽アル。内大臣宗盛公ハ。御船ニ召レテ儀近ク碇首ヲ下シ。其後ニ能登守教經備中守師盛。尾張守清定。若狭守經俊ナド。船ヲ浮ベテ見物ス。遠近ノ男女老少ハ雲霞ノゴトク群集シテコレヲミル。其時カノ島ノ築止メニ松王ヲ入タル石櫃

(1ウ)

ヲ念仏ノ声ト共ニ沈メケル。阿波民部ハ経石ヲ沈メケルニ。不思議ナルカナ竜王ノ逆鱗忽ニヤミ。松王カ仁心ヲ感ゼシニヤ島ハ程ナク成就スル。十四町ノ所ナリ折節島ノ西北ナル神撫山ノ峯ヨリ紫雲平沙ニタナビキ。音楽虚空ニサヘワタリ。異香芬々トシテ薰ジワタリ。空中ヨリハ五色ノ花フリ下リ正面ニハ阿弥陀如来觀音勢至アラワレ玉ヒ。光明赫奕トシテ在ス恰モ金山ノコトシ。其後

ニハ二十五菩薩現シ玉フ。山海慧菩薩ノ鞞鼓ノ音ハ此土不二ノ響アリ。日藏王菩薩ノ玉ノ笛。月藏王菩薩ノ瑠璃ノ琴共ニ無漏実相トヒ、キ。薬上菩薩ノ琵琶ノ音ハ真如平等ノ調アリ。師子吼菩薩ノ箏。虚空藏菩薩ノ磬ハ清淨究竟ノ声スナリ。陀羅尼菩薩ノ笙ノ音ニハ禪定正智

(2オ)

ノ徳ヲ唱へ。徳藏菩薩ノ大鼓ノ音ハ内証發覺ノ理ヲノベタリ。其音楽ノ有難サ人々アツト感スルバカリ。時ニ不思議ヤ松王カ姿虚空ニアラワレ。忽如意輪觀世音ト化現シ玉ヒ光明アタリヲカ、ヤカシテ拜マレ玉ヘハ。来迎ノ諸菩薩。普現三昧王。華嚴王定自在。法自在。金光明。金剛藏。薬王。白象王等スヘテ二十五ノ聖衆。各々音楽ヲ奏シ玉ヘハ。群集ノ貴賤ハ眼前ニカ、ル奇瑞ヲ拜ミ奉ルニ身ノ毛モ竦起随喜ノ涙ト、メ難ク。声ヲソロヘテ南无阿弥陀仏ノト唱ル声ハ。大地ニヒビキ天ニ轟キ山ヲサワガシ。梢ヲナラシ。天王ヲ始メ奉リ百官公卿モ相国入道モ。覺スシラズ南无阿弥陀仏ト唱ル念仏ハ。

雷ライノ如ク海上ニハ宗盛公ヲ始メ平家ノ一門数スヒヤクン百艘ノ船ノ中ヨリ。唱ル念仏ノ声

(2ウ)

ハ駭ダイア風ノ激ゲキスル如ク暫シハシハ鳴ナガモ静シヅラズ。明月モ家兼ナキヤモ渚ササ(ママ)ニヒカヘテ拝シケル。随喜ノ涙ニムセビ念仏シテ立タ婦フル清盛入道ハ感涙カシレイタ袂モトヲシボリ玉ヒ。渴仰カツゴノアマリ供養クエウノ為メ七堂カラン伽藍カランヲ建立セント。再ヒ台命タイメイヲ下シ玉ヒ。諸司ニハ五条大納言国綱卿奉行ハ阿波民部重能ニ命シ玉フ。既ステニ日暮クレニ及ヒケレハ天王モ還幸クワシキヨナラセ玉フ。海毛渚モ一同ニナギワタリ感涙カシレイヲ流サヌ者ハナカリケリ

經島山来迎寺縁由并福原新都、怪異

○斯シテ松王児童ノ人柱ニ立。築島程ナク成就シヤウジユセシカハ相国入道大キニ喜ヒタマヒ。已前ニ召囚メシトラヘツル二十九人ノ者共ヲコト々獄中コクヨリ出シ玉ヒテ。悪七兵衛景清ニ命ジテソレ々

(3オ)

ニ引出物下サレ放ハナチ免ユルシ玉ヒケレハ。二十九人ノ面々ハ。夢ノ心地コノチシテ籠鳥ラウテウノ天ニ搏ハクツガ如ク。又蘇生ヨミカヘリタル思ヒニテ。賜タマモヲ頂載テウクイシテ。ヲノガサマ々立カハ婦フル。一族類ソクザイ屬ゾクノ面々大ヒニ喜ヒ。此偏コレヒトヘニ明月ノ父ノ命ニカワラントアリシ孝心。松王児童ノ身替カハリマシリニ立玉ヒシ仁慈ユヘナリトテ喜ヒアフコト限りナシ。時ニ松王ヲ沈シヅメトコロ来迎アリシ地ニ。七堂伽藍ソウエイヲ造營アル。奉行阿波民部。人夫数千人ヲ以テ建立ヲ急ステキケル。既ニ寺院成就フコダセシカバ。松王児童カ追善ノタメニ。念仏不断フコダニ怠ルベカラズトテ。常念仏ノ道場トナシ玉フ。故ニ不断院フコダト号シ。築島供養シツカエウノ寺タルニヨリ。經島山キヤウタカザント号ス。来迎寺ト名ケシハ。聖衆シヤウジュ来迎ライイキアリシ靈地ナレバトカヤ。松王入水ノ処ニハ。印ノ石碑シレシヲ立玉フ。今ニ

(3ウ)

猶存セリ。清盛公自ラ像影ゾウエイヲ作ラセ玉ヒ。此寺ニ納ナメ玉フ。松王ガ像アリ本尊ハ阿弥陀如来ノ尊像。運慶ノ彫刻ナリ。堪慶ノ作ノ観音。弘法大師伝来ノ弁財天ノ像牛王

及ビ梅ノ実ヲ以テ七堂伽藍ノ靈場ヲ画細カニ彫刻スコ
レヲノ宝物今ニ有リ。其後數度ノ兵火ニ灰塵ニ委シテ
今ハ昔ニ似ザリケリ。僅二十分カ一ニモアラズ悲ムヘシ
惜ムヘシ。斯ク築島成就セシカバ西国往來ノ船。風波ノ
難ヲ助リテ喜フコト限リナシ。天下ハ既ニ清盛入道ノ心
ノ儘ニシテ。掌ニ握リ玉ヒシ如ク。六十余州ノノマ
マニ内。平家ノ領シ玉ヘルハ三十余箇国ニシテ。已ニ半
國ニ過ギタリ。其外庄園田畠幾クト云數ヲシラス。綺
羅充滿シテ堂上花ノ如シ軒騎群集シテ門前市ヲナス。
楊州ノ金子。刑州ノ珠。

(4オ)

呉郡ノ綾。蜀江ノ錦。一トシテ闕タルコトナシ。歌堂
舞閣ノ遊ビ魚竜。爵馬ノ翫ビ禁闕仙洞モ及ブマシキ次第
ナリ。清盛ハ驕奢イヨク甚シク。其コロ都ニ聞ヘツ
ル白拍子ノ祇王祇女ノ娣妹ヲ寵愛アリシガ。仏御前ト
云ヘル白拍子ノ艶態無双ノ美女アリテ御館ヘ推參シ謁
ヲ請フコト度々ナリ。入道大ニ怒リ。左様ナル遊ビ者

ハ。人ノ召ニテコソ參ルベキニ。推參セシコト奇怪ナ
リ。仏ニモアレ。神トモイヘ。祇王ガアラン所ハ八叶フ
マシキゾ。早ク追ヒカヘスヘシト仰セケルヲ。祇王傍
ニアリテ。少キ者ノ遠方ヨリ。遙々ト思立テ參リシヲ。
情ナク追カヘサセ玉ハンコソ便ナケレ。唯一タビ舞ヲ
御覽アリテ返サセ玉ハ。幾程カ喜ヒ申サントテ勸メケ
レハ。汝ガカク申ニ免ジテ一見セントテ。

(4ウ)

仏御前ヲ召テ舞ヲナサシメ玉フニ。眉目盼タリ。巧笑倩
タル美女ノ舞アリサマ。燕ノ翔リ鶺鴒ノ驚クバカリ。言モ
心モ及バレズ。清盛愕然トシテ。コレヨリ仏御前ヲ愛シ
玉ヒ。留メテ左右ニ置セ玉ヒ。祇王娣妹ヲ追ヒ出シ玉
フ。祇王モ昨日今日トハ思ヒモヨラズ。泣々述懐ノ一
首ヲ障子ニ書付テ。宿所ヘソ販ケル。

萌出ルモ枯ルモ同シ野辺ノ草イヅレカ秋ニアワテ果ヘ
キ

コレヨリ祇王娣妹ハ世ヲ恨ミ。母モロトモニ尼トナリ。

嗟サガ峨ガノ奥ウクナル山里シバニ。柴イホリノ庵ヒキムスヲ引結ヒキムスビ念コバ仏シテ在シケル。仏御前ビハ日ヒニ寵愛カフムヲ蒙リケルガ。ツラ〜思イッビケルハ。萌出シユクサツルモ枯アヒル、モ同ジ野辺ノ艸シウサウ。何レカ秋霜シウサウノ肅シユクサツ殺アヒヲ免レシヤ。豈アヒ祇王アヒノミナランヤ。我トテモ亦カク斯カクノ如シ。浮世ウキヨノ栄花エハナハ夢中ムチウノ夢。老少不定ラウシオウテイハ

(5才)

娑婆サハノ掟オキテト。コレヲ因縁インエントシテ館ヤカクヲ忍イビ出テ、祇王キウ等ノカクレ住スム。嗟峨サガニ尋タツ子ヒト至リ。事コトノ子細コトコトヲ物語リ。終ツイニ身ミヲ墨染スミノメニソメナシケル。今年コトウシ纔ワツカ二十七歳トカヤ。コレヨリ四人ヨシヤハ同室ドウシツノ好ヨシヲ結ムスビ。共ニ隔ヘナク仏ツカニ仕ツカヘ。他念ヒタナカリケル。後ニ吉水キクミヅニマヒリ法然上人ホウゼンノ御教化ミケウカニヨリテ。念アヤシ仏往生フツシノ素懷ソクワイヲ遂トドケルゾ有難カタキ。カクテ福原フクハラへ都ウツシ遷玉ウツシヒテ後アヤシハイロ〜ノ怪アヤシキ事コトアリテ静シヅカナラズ。或夜入道フシノ臥玉フシヘル一問ヒトマニ。大ナル人ノ首出クビキタリテ。入道フシヲハタト睨ヒラム。清盛少シモ驕サカカズ。又コレヲ睨ヒラミカヘサレケレハ。ジミ〜ト消失スウセケリ。或ハ大木オホキノ倒タラル、音ネシ。人ナラハ三四千人ワラフノ笑マユ。フ声コシケル。コレ

八天狗ヤチテンノウノ所シヨ為イト申シケル。或時清盛帳台テウケイヨリ出テ。後園コウエンヲ見玉ミタマヘハ。数万スマンノ髑髏ドクロミチ〜

(5ウ)

テ。上ナルハ下ニナリ。端ハシナルハ中ニ覆フリ。スザマシキアリサマニテ。山ノ如ク高クナル時。一々マタ眼メヲ怒イカラシテ。吃キツト睨ヒラミテ眈マタモセズ。清盛チツトモ驚オドロクケシキナク。同ク睨ヒラテ立タレケレハ。霜露サウロノ果日カワジツニ消ガゴトク。跡方アトモナク失ニケルハ。怪クモ又スザマジケレ。

清盛燒シユウ南都三井寺ミナトサンヰジ并ナ東北トウノ諸源氏蜂起シユゲンシヒユキ

○治承四年シユウシヤウニ及ヲビテ。源三位頼政ゲンサイイ謀反ボムハンヲ起シ。高倉タカクラノ宮ミヤヲス、メ奉リ。数多アツノ兵士ヘイシヲ集アツメ。三井寺南都サンヰジノ大衆オホシユヲカタラヒ。合戦セツノ用意ヨウイヲナシ。奢ホロル平家ヘイカヲ亡サント蜂起キセシカバ。清盛入道大ヒニ怒リ。一時モ早ク攻セツバセト下知ゲアリテ。左兵衛督知盛サヘウエンカミトモモリ。頭中トウチュウ將重衡シヤウシヤウヲ大将軍トナシ。其勢二万八千余騎コバタ。木幡山コハタヲ

(6才)

ヲ打コヘテ。宇治橋ノ結ニ押ヨセタリ。頼政等ハ平等院ニ入テ。橋ヲヒカセテ防ギケルガ。運命拙クシテ敗走シ。宮モ光明山ノ鳥井ノ前ニテ討レ玉ヒ。頼政モ平等院ニテ生害アル。平家ノ軍兵大ヒニ利ヲ得テ。勝鬨ヲ作り。五百余人ノ首ヲトリ。太刀長刀ノ先ニ貫キ。高クサシアケテ。六波羅へ皈陣ス。入道猶モ怒リニタヘズ。南都三井寺ヲ攻ヘシトテ。五月二十七日。大將軍ニハ。左兵衛督知盛。薩摩守忠度。都合一万余騎ニテ。三井寺ニ押ヨセテ合戦シ。ツイニ放火シテ焼亡シ。一字モノコラス灰塵ニナス。僧綱十三人ヲ闕官シ。大衆三十余人ヲ流ス。南都ヲ攻ツフスヘシトテ。大將軍ニハ。頭中將重衝(ママ)。中宮亮通盛。其勢四万余騎ニテ発向シ。大ニ合戦シテ大衆数多討トリテ。コレモ同ク

(6ウ)

放火シケルニ。猛火サカンニ燃上リ。興福寺ハ淡海公ノ造立。藤原氏ノ祈願所ナリ。東金堂ニ在ス仏法最初ノ釈迦ノ尊像。西金堂ノ湧出ノ観音。瑠璃ヲナラベシ

四面ノ廊。朱丹ヲ交ヘシニ階ノ楼。宝塔堂閣忽ニ烟トナルコソ悲シケレ。東大寺ハ聖武皇帝ノ手ヅカラミガキ立玉ヒシ金銅十六丈ノ盧遮那仏。天平十七年ニ造立アリシ尊像モ。御頭ハ焼落テ大地ニアリ。御身ハ鎔テ山ノ如ク。天竺ニモ中華ニモ。コレ程ノ法滅ハアルベシトモ覚ヘズ。僧徒スベテ四千余人。或ハ討レ。或ハ焼死シ。目モアテラレヌ有様ナリ。聖武帝宸筆ノ御記文ニモ。我寺興福セバ。天下モ興福スヘシ。我寺衰微セハ。天下モ又衰微スヘシト。記シ玉ヒシガ。天下ノ衰微センコト疑ヒナシトテ。貴賤悲傷セザルハナシ。

(7オ)

入道ハ大ヒニ喜ヒ。コレニテ憤ハ晴タリトテ。嬉悦ナ、メナリ。

△案スルニ。東大寺ハ。聖武皇帝ノ勅願所ニシテ。天平十五年。近江国滋楽ニ於テ。大仏ヲ造リ。同十六年ニ。仏像成ル。高閣ヲ営ミ。コレヲ安置ス。同十七年ニ。南都ニコレヲ移ス。天平勝宝四年四月九

日。供養アリテ。皇帝行幸アリ。常在^{シヤウザイフメチ}不滅^レノ靈地^{レイ}ニテ。朽損^{コフシ}ノ期^コアルヘシトモ思ハザリシニ。治承四年ノ一乱ニ。毒焰^{トクエン}ノ煙^{ケフリ}ト消シハ。悲ムヘキノ甚シ^{ハナハタ}。後白川法皇ノ官旨^{ケンシ}ニヨリ。俊乘坊^{シユンシヤウ}重源再興シ。大仏及ヒ仏閣成ル。建久六年三月十二日供養アル。後鳥羽院行幸アル。右大将頼朝上落ス。コレヨリ後。永祿十年松永彈正久秀ノ兵火ニ依テ。又モ御頭^{ミカド}焼落^{ヤケヲ}テ回祿ス。当国ノ画工山田道安^{クハコウ}

(7ウ)

ト云者。財産^{ザイサン}ヲナゲウチテ是ヲ補フ。延宝^{エンホウ}ノ頃^コ。当寺ノ僧公慶上人。造立ノ大願ヲ発シテ。勅許^{チヨクキョク}台命^{タイメイ}ヲ承ケ。諸国ヲ勸進シテコレヲ建。貞享五年四月二日ニ上棟シ。宝永二年四月十日堂供養アルトナリ。興福寺ハ。大織冠鎌足公。山城ノ国宇治郡小野郷山階ニ居住アリ。其地ニ寺ヲ建。テ。山階寺ト号ス。後白鳳元年。和州高市郡厩坂ニ遷サル。改メテ厩坂寺ト称ス。後又元明帝和銅三年ニ。春日ノ地

ニ遷サレ。興福寺ト号ス。淡海公ノ御建立ナリ。乃チ法相宗^シニシテ。藤原氏ノ御願寺ナリ。然ルニ治承四年ノ兵火ニヤカレ。其後モ度々^ト回祿アリケレドモ。建立マタ故^{モト}ノゴトシ。応永六年。鹿園院義満公。御再興アリシカドモ。又焼亡^{セウカ}シテ茫々タル

(8オ)

荒野トナリ。纔^{ワツカ}ニ其礎^{ソノイシツ}跡存スト。云云○異説ニ曰ク村上天皇ノ御宇。南都ノ仲算和尚ト。山門ノ慈惠僧正ト。清涼殿ニ於テ論議ノ問答アリ。此遺恨ニタヘズ。慈惠僧正ハ清盛ト生レ。南都ヲ焼レシトアリ。其説甚タ鑿空ナリ。中算慈惠共ニ権者ナリ。縦^縦ヒ其人ニ恨^ミアリトモ。豈^{アニ}堂舍^{ドウカ}仏像ヲ焼^{ヤク}ベケンヤ。況ヤ生ヲ隔テ。遙ニ後代ノ事ナルルヤ。凡智ヲ以テ権者ヲ議スルハ。猶コレ鸞鳩斥鴳ガ。大鵬ヲ評スルガ如シ。笑フヘシ。蓋ニ三井寺ノ事ハ。予愛護若一生記ヲ編シテ。此ヲ詳ニス。故ニ今煩ハシク兼言セ

金鳥早ク過テ。治承五年ニナリス。相模ノ国ノ住人。大庭三郎景親。早馬ヲ以テ福原ヘ注進シケルハ。伊豆ノ流人。前兵衛佐頼朝。

(8ウ)

舅ノ北条時政ヲ語ヒ。屋牧ノ館ニ二押ヨセ。判官兼高ヲ夜討ニ亡。東国ノ兵士ヲカタラヒ。石橋山ニ立コモルヲ。我々コレヲ攻メ候ヘハ。安房上総ヘ渡リ。猶勢ヲ催テ。上洛ノ企コレアリ候フ間。早々征伐アルヘシト注進ス。平氏ノ一門大ヒニ驚キ。公卿僉議アリテ。討手ノ評議マチ々ナリ。小松ノ維盛。薩摩守忠度ヲ大将トシテ。三万余騎ニテ発足アリ。駿河ニ着シケルガ。源平对阵シテ未ダ戦モセザルニ。夜富士川ノ水鳥ノ羽音ニ驚キ。皆々逃走シテ都ニカヘル。斯ル所ニ。木曾ニ在ケル次郎義仲。謀反ヲ企テ。栋井小弥太。滋野行親ヲカタラヒ。北国ノ兵ヲ引具シ。都ヘ攻入ヘキ由ノ注進アリケレバ。平家ノ一門大ヒニ駭キ。僉議マチ々ナリケレハ。宗盛仰セケルハ。我コノ度ハ大将軍ヲ承

テ。凶徒ヲ征伐スヘキ由ヲ望マレケレバ。スナハチ御免許アリテ。先北国ノ敵ヲ追討スヘシトテ。二月二十七日ニ。既ニ発向ノ用意ラゾナシ玉フ。

清盛入道死ニ熱病ニ并隠戸駭水通レ船論

○前ノ内大臣宗盛公。北国ノ敵徒ヲ追討セントテ。一門ノ面々ヲ引具シ。其勢十万余騎ニテ。既ニ打立ントシ玉ヒケル夜半計リヨリ。清盛入道。違例ノ心地トテ止リ玉フ。明ル二十八日ニハ。入道重病ヲウケ玉ヘリト。聞ヘシカハ。都ノ人々モ。スワコソトヒシメキアヘリ。時ニ入道ハ。病ヒツキ玉ヘル日ヨリシテ。湯水モ咽ヘ入レラレズ。身ノ内ノ熱キコトハ火ヲ焼ガコトク。寢所ノ四方五六間カ内ハ。入ル者熱サニ堪ガタシ。唯宣フ言トテハ。宛々ト

(9ウ)

バカリニテ。苦ミ玉フアリサマハ。唯事トモ見ヘ玉ハ

ス。一門ノ面々モ。愕然トシテ驚クバカリナリ。余モタヘガタク。ミヘケレハ。比叡山ヨリ千手井ノ水ヲ汲ミ下シテ。大ヒナル石ノ船ヲ作り。ソレニ水ヲ漫々トタ、ヘ。入道殿ヲ其中ニ入レテ。寒シケルニ。水ハ忽、湧アガリテ。湯ニナリテ沸タリケル。恰モ焼石ヲ水中ニ投スル似タリ。若ヤト筧ノ水ヲシカケテ。入道殿ニ流シ、クニ。焼ケタル鉄ノ如ク。水ホトバシリテ。ヨリツカズ。水ハ焰々トシテ。黒煙ハ殿中ニミチ〜テ。炎ハ渦卷アガル。人々モアキレ果タルバカリナリ。加持祈禱フヘシトモミヘズ。斯ルトコロヘ。宇佐大宮司公通注進シケルハ。鎮西ノ者トモ。緒方三郎維義ヲ始メ。白杵戸次

(10オ)

松浦党ニ至ルマテ。皆源氏ニ同心イタシ。軍兵ヲ相催シ。四国ノ河野四郎等モ。皆一味イタシ。攻メ上ルヘキ由ニテ候ハハ。早々追討アルヘシトゾ告タリケル。コレ

ハト面々驚ク折柄。監物太郎頼方息ヲキツテ注進シケルハ。紀伊ノ国ノ住人。熊野別当湛増。其身平家ノ重恩ヲ蒙リナカラ。忽チ異心ヲ生シテ源氏ニ一味シ。南方ノ兵士ヲ集メ。既ニ合戦ノ用意頻リナリト告知ス。平家ノ人々ハアマリノ事ニテ忙然トシテ。東国北国ノ大事アル上ヘニ。又モヤ南海西海マテ。斯ノ如ク蜂起スル事ハ。何ナル事ゾト歎キ悲マヌハナカリケル。カクテ入道ノ熱病ニテ。一門ノ人々ハ肝魂ヲ失フバカリ。騒動スルコト斜メナラズ。爰ニ又恐シキ事コソ有ケレ。入道ノ北方。八条ノ二位殿ノ夢

(10ウ)

二。ソモ恐シキ猛火ノ焰々ト燃タル車ノ主モナキヲ。門ノ内ヘ遣入レタルヲ見レハ。車ノ前後ニ立タル者ハ。或ハ牛ノ面ノ如モアリ。又ハ馬ノ如キ面ノ者モアリテ。イロ〜ノ鬼形ノ者。左右ニ引ソヒテ。車ノ前ニハ鉄札ヲウチタリ。ソレニ無ト云文字バカリヲ記セリ。二位殿夢ノ内ニ。コレハ何地ヨリ何方ヘト尋玉ヘハ。彼鬼共

口ヲソロヘテ。コレハ平家太政入道殿ノ。悪行超過シ玉
ヘルニヨリテ。閻魔王宮ヨリノ。迎ノ御車ナリト呼ハ
リケル。其時二位殿アノ札ハ如何ニト問玉ヘハ。南閻浮
提金銅十六丈盧遮那仏ヲ。焼亡シ玉ヘル罪業ニヨリ
テ。無間ノ底ニ沈メ玉フヘキ旨。閻王ノ序ニテ御沙汰ア
リシガ。無間ノ無ヲハ記サレタレドモ。マダ間ノ字ヲハ
書レヌナリト申シケル。二位殿夢覺

(11オ)

後ニ。汗水ニナリ。コノ事ヲ語り玉ヒシカバ。聞人皆身
ノ毛竦起恐レケリ。コレヨリ靈仏靈社ヘ金銀七宝ヲナ
ゲ。馬鞍鎧甲弓箭太刀刀ニ至ルマテ。取出シ運び出
シ。祈祷セラレケレドモ。叶フ様子ハ見ヘ玉ハズ。只一
門ノ人々。跡ヤ枕ニサシツドヒ。歎キ悲ミ玉ヒケリ。閻
二月二日ノ日ニハ。二位殿アツサ堪。カタケレドモ。
入道相国ノ御枕ニヨツテ。御有サマ見奉ルニ。日ニソヘ
夜ニマシ。頼少ク見ヘサセ御座候フ。物ノ少モ覺ヘサ
セ玉フ内ニ。思ヒ残サレ候フコトアラハ。仰セ置レヨト

アリケレハ。入道ハ日頃ハ勇々シキ豪將ナリシカド
モ。將死ノ時ニナリシカバ。世ニモ苦シゲナル声ニ
テ。サレバ当家ハ。保元平治ヨリコノカタ。度々ノ朝敵
ヲ平テ。勸賞身ニアマリ。忝クモ一天ノ君ノ御外戚
トシテ。位

(11ウ)

丞相ニイタリ。榮花ステニ子孫ニノコス。今生ノ望ミ
ハ。一事モ思ヒ置クコト更ニナシ。只思ヒ置クコ
ト、テハ。兵衛佐頼朝ガ首ヲ見ザリツルコトコソ口惜ケ
レ。我死シテ後ニ。追善モ供養モ致ニ及ス。又堂塔ヲ立
ルコトハ猶無用ナリ。唯急キ討手ヲサシムケテ。頼朝ガ
首ヲ刎テ。我墓ノ前ニ手向ケテクレヨ。今生ノ残念ハコ
レ一ツナリト。苦キ息ノ下ヨリモ。無念ノ眼ライカラシ
テ。遺恨ノ顔色ニテ申サレケルハ。罪深クコソミヘニ
ケル。若ヤ助リ玉フヘキカト。板ニ水ヲ置テ。其上ヲ
展転ツレドモ。助ル心地ハナカリケリ。憐ムヘシ入道淨
海。今年六十四歳ニシテ。定命遁難クシテ。終ニ閻二

月四日ニ。悶絶躡地シテアラチ死ニゾ死シ玉フ。一騎
当千ノ勇士。粉骨碎身ノ忠臣。アマタ並居トイヘドモ。

(12オ)

無常ノ殺氣ニハ敵スルコト能ス。愛宕ニテ煙ニナシ奉
り。骨八円実法眼頸ニカケ。摂津ノ国ニ下り。経ノ島ニ
納メケル。今ニ其旧蹟存シテ。清盛ノ墓アリ。コレ 併
ラ。皆仏ノ善巧方便ニテ。善悪邪正ノ道理ヲ示シ玉ヘル
ナリ。恋モ無常ノ種トナリ。悪業造レハ。其現報カクノ
如シト示シ玉フ方便。末代ノ衆生ニ。教化ヲ残玉フ。淨
海入道モ。本地ハ六道能化ノ地藏菩薩ナリ。明月姫ハ吉
祥天女。松王ト云モ。如意輪観音。皆衆生済度ノ御方
便。実ニ有難キ事トモナリ

△案スルニ。清盛ノ病ハ。火ノ病ナリト云事。平家物
語等ノ諸演史ニ載ル所ニシテ。人口ニ膾炙スル
事。滔々トシテ皆コレナリ。思フニコレ。所謂熱病
ニシテ。大渴乾燥シテ水ヲ

(12ウ)

飲ト煩苦スルモノ。傷寒論ノ白虎湯ノ条下ナド
ニ。出タル類ナルヘシ。至テ結熱甚シキ時ハ。発狂
煩躁シテ。水中ニ入テモ猶モタヘ苦ム事ハ。千金
方。外台秘要等ノ諸医籍ニノスル所ヲ見ルベシ。清
盛ノ病モ。蓋コノ類ナランカ。是予カ一斑ノ管見
ナリ。此ヨリシテ。源平大ヒニ合戦シテ。一ノ谷ノ
敗。八島ノ軍。多年ノ榮華モ。原上ノ骨ト枯レ。馬
蹄ノ塵トナリ。春風ノ草ト化シ。赤間カ関ノ滅亡
ニ。一族ミナ蒼海ノ底ニ沈ミ。江魚ノ腹ニ葬リテ。
朝タニ鮫人ノ涙タヲソ、ギ。暮ニハ鬼火ノ青ヲ見
ル。宗盛終ニ束縛セラレ。耻臭ヲ万古ニノコス。
古ニ所謂驕泰以失レ之トイフモノナリ。其事曲
ニ諸書ニ出タレハ。今煩ク贅セズ予嘗テ源平異語
(13オ)

十卷ヲ編シテ。コレヲ評論スルコト詳カナリ。因テ
コ、ニ略ス。

○往年東都ノ儒士安藤東野氏名煥図字東壁ノ文集ニ。

平相国ノ論一篇アリ。清盛ヲ論スルコト。甚至当ナリ。其言ニ曰。相国於主人ノ功罪相半ハスト。イヘリ。信ニ然リ。時運ニ乗ジ。闔国兵馬ノ權ヲ執リ。年少クシテ早ク勇名ヲ得テ。邦家ノ守護トナリ。保元ノ乱。平治ノ軍。戦功又大ナリ。然レドモコレハ時ニ乗テ。源氏ヲ平グントスル者。モトハ自家ノ為メナリ。後官ヲ累テ大相国トナリ。威權手ニ入ルトキ。上皇ヲ城南ニ困メ。関白ヲ海西ニ流ス。妓女ヲ蓄ヘ。淫ヲ放マ、ニス。小督ヲ髡シテ尼トナシ。平安ノ旧制ヲ厭フテ。都ヲ福原ニ

(13ウ)

ウツシ。帝王ヲ苦メ。禿童ヲ分チ行カシメテ。民ヲ困ム。家族ヲ進メテ高官ニ昇セ。赦ヲキワメ。欲ヲ恣ニス。重盛カ諫ヲ用ヒス。妄リニ公卿ヲ犯ス。放火シテ園城南都ノ堂閣ヲ焚キ。僧徒ヲ誅ス。コレヲノ事ハ。平家物語等ノ演史ニ記テ。皆人ノ知トコロナリ。然レトモ。其中天地ノ至変アリテ。独リ

其人ヲ罪スベカラザルコトアリ。其嚴島ヲ信ジテ再建シ。宮樓ヲ嚴重ニ造営シ。無双ノ絶景ヲアラハス。マタ芸陽ノ隱戸ノ瀬戸ヲ切ヌキ。船ノ往来ヲ助ケラル。其續功。豈小々ナランヤ。此隱戸ノ瀬戸ト云ヘルハ。山ヲ切テ西国往来ノ路トナス。山ノ高サ二丁余ナリ。若コノ瀬戸ナキ時ハ。数十里ノ迂遠アリテ。殊ニ風波悪キコト甚シク。舟行ノ

(14オ)

難ナルコト。彼方ノ黄牛峽ニ似タリ。故ニ動レハ。輒破船ノ難アリ。清盛コレヲ憂ヒ山ヲ一ツ切ヌキテ。淫徑ヲナシ。船ヲ通ズ。是ニ於テ。迂遠破船ヲ免レ。纔二十丁ニ足ズシテ。自由ノ往来ヲナス。是清盛ノ功績。千万世ノ庇功豈大ヒナラズヤ。今コ、ニ一図ヲ記ス。

此間東西二丁バカリ。又ハ三四丁ハカリ。(図一) 処ニヨリテ広狭アリ南北ハ七八丁ノ間アリ。岩山ヲ切ヌキシナリ。両ノ岸。海ノ

底。ミナ岩ナリ。ホソ間ノ如シ。西ノ方ニ
八町アリ。皆漁獵ノ徒ナリ。寺アリ。清盛
ノ塔ハ



(図1)

(14ウ)

切シ処ノ海岩ノ上ニアリ。一日ノ内ニハ。潮ノ満
干度々ナリ。コレヲ考ヘテ舟ヲ通ズ。然ラズンハ潮
早逆浪ニテ。順風トイヘドモ難シ通。潮ノタルミニ
通ス。動スレハ岩ニテ底ヲスリテ。過アリ。潮ノタ
ルミノ時ハ。浪静ニシテ置ラシケルガ如シ。舟行
ノ間。七八丁。此瀬戸ヲスギテ西国船上方船互ニ往
来シ。両方ニテ船待スルナリ。広島ヘハ海上七里
余。厳島ヘハ五六里計ナリ。此瀬戸ニ一奇事アリ。
筆ノ次デコ、ニ付記ス。毎歳大三十日ノ夜。丑ノ刻
ニハ。此所潮干瀉トナル。清盛ノ塔ノ前ニ。七八間
四方ノ溝渠アリテ。陶盗ノ如シ。此所ニノミ水ア
リテ魚コト々々集リ居ル。是ヲ知者ナシ。時ニ
往来コレヲ考ヘ知者アリテ。窃ニソノ夜ヲ

(15オ)

考ヘ。魚ヲ取シ者アリシガ。程ナク両眼ツブレテ盲
人トナレリ。然シテ後。其子孫男女ニ限ラス目ヲ煩
ヒ。眼タブレテ甚タ艱ムト。其里人親ク予ニ告ク。

円信ケイシヤウ去陽ワウクワウニ往還シテ。此瀬戸カゴヲ通フ事数回ナリ。
 仔細シサイニコレヲミルニ。殆ド人カノ及ブベキニ非
 ス。恐クハ鬼工キコウナランカト。疑フバカリノ駭水ケイスイナ
 リ〇一説ニ曰。清盛コ、ヲ切ヌク時ニ。大勢ノ役夫ニソフ
 ヲ以テ。一日ノ間ニ造ルニ。日ステニ暮ントス。清
 盛今暫クセンコトヲ欲シ。扇ヲ以テ日輪ヲ招キシカ
 バ。日又モトラセ玉ヒシト云フ。是レ僻説ナリ。按
 ズルニ。淮南子ニ。魯陽公与韓 遶。戰。酣
 日暮。援ヌキ戈揮ホコラマ之。日為タメニ之反コトサシ。三舍トアリ。
 左伝ノ註ニ。三十里為ニ一舍トアレハ。三舍トハ
 九十里ナリ。此レヲ

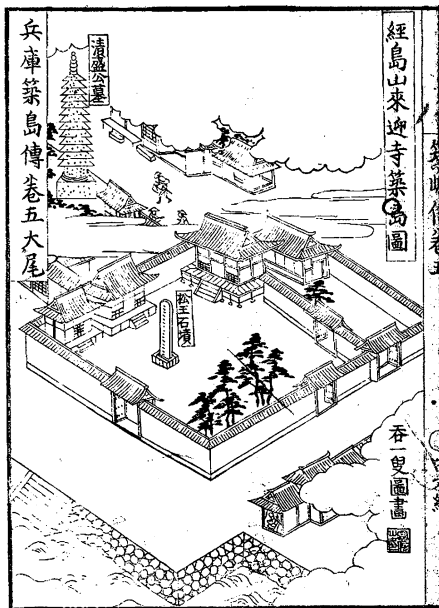
(15ウ)

以テ付会フクワイスル所ナラン。清盛ノ矯々タルモ。奚其
 レカクノ如クナランヤ。其他清盛ノ成功尠スクナナカ
 ラズ。故ニ功罪相半ストアルコト。信ニ当ル哉。偶
 爾コト此篇ヲ述スルニ及ヒテ。聊付論スルコト爾リ。其
 佗ハ勸譚クワンタンノ為ニアツカラズ。因テコレヲ略シヌ

翻刻『兵庫築島伝』その五

天明元年辛丑五月幾望

芸州山県郡有田邑大福寺吞一叟釈円信識



(16オ)

(16ウ)

勸化世事談 全部三冊出来

興御書嚙滯録 全部五冊出来

俊徳丸行状記 全部五冊近刻

天明二壬寅中夏穀旦

浪速書肆

敦賀屋九兵衛

同 六兵衛 梓

【卷五解題】

(17才)

四卷にわたって記されてきた築島の来由は、この巻五をもつて完結する。幸若舞『築島』を始めとする兵庫の築島を題材とする作品群は、多く松王の入水による築島成就をもつて結びとしているが、『兵庫築島伝』はさらにその後も、清盛の振舞いをその最期に至るまで、『平家物語』に拠りながら記している。この巻五は、早くに築島の完成を記しており、多く築島成就後の清盛と、著者である円信による考証と評とに紙幅を割いている。この兵庫の築島の来由を核とするも、その成就後も、清盛の所為を記した点についてであるが、そもそも『兵庫築島伝』は清盛の出自から筆を起しており、当初より円信は、築島成就の由来を中心に据えるも、『平家物語』の記述に拠りつつ清盛の所業もまた、勸化を目的とする上での、中心的題材とする構想を抱いていたものと思われる。築島後の清盛を中心とする記述は、この構想に従った必然の結果と考えられ、清盛の最期をもつて筆を置いたことにより、一貫性を持った完結を見るのである。

そして巻五の特色と言える大きく付された円信の考証についてであるが、音戸の瀬戸に関する記述に力を注いでいることに気がつく。本編では記すことのなかったこの音戸の瀬戸を、円信はあえてここで記し、詳細に一図を付して紹介をしている。「円信芸陽二往還シテ。此瀬戸ヲ通フ事數回ナリ」という表現から、芸州の僧円信にとつては身近な地であったことが窺えるのであるが、円信はこの音戸の瀬戸を清盛の功績と評価している。勸化の題材として清盛の罪を扱うもそのみに終始せず、殊更勸化から離れて功績も記すことで、地元にゆかりのあった清盛という人物を、功罪相半ばする人物として伝えようとする円信の姿勢が認められるのである。なお巻五における考証の中に、『愛護若一生記』や『源平異語』なる書名を挙げて、詳細を略する旨を述べた箇所が存するが、これは紙幅に限りがあったためともいえるが、一種の宣伝と考えた方が自然であろう。

関西学院大学図書館蔵『兵庫築島伝』の刊記には、書肆として敦賀屋六兵衛と敦賀屋九兵衛の名を記している

が、中村幸彦氏蔵本『松王物語』（文化九年刊・叢書江戸文庫『小枝繁集』所収）には、「因縁勸化兵庫築島伝 片かな本 全部五冊」と記す広告が載せられている。この広告を有する『松王物語』の書肆は、播磨屋新兵衛と河内屋嘉七であるが、寛政二年『板木総目録株帳』には、『兵庫築島伝』の板木株所有者として、敦賀屋九兵衛、敦賀屋六兵衛、河内屋嘉七、勝尾屋六兵衛、播磨屋新兵衛の名を記しており、播磨屋新兵衛と河内屋嘉七が『兵庫築島伝』を宣伝することは、必ずしも不思議なことではないと言える。一方で文化九年改正『板木総目録株帳』を見ると、播磨屋新兵衛と河内屋嘉七の名のみ記されているのである。つまり関西学院大学図書館蔵『兵庫築島伝』は、敦賀屋六兵衛と敦賀屋九兵衛を書肆として記しているが、この兩名はその後、板木株を手放しているのである。それゆえ未見ではあるが、『松王物語』の広告や文化九年改正『板木総目録株帳』の記載は、関西学院大学図書館蔵本とは異なる刊記を有する板本が、存在する可能性を示しているといえよう。

『兵庫築島伝』の後代への影響に関しては、小枝繁の『松王物語』が、構想の要所は全て『兵庫築島伝』に依拠していることを、横山邦治氏（『読本の研究―江戸と上方と―』風間書房 一九七四年四月）が指摘されており、また式亭三馬の『昔語兵庫之築島』が『兵庫築島伝』の剽窃であることを、井上啓治氏（『式亭三馬の文学態度―初期読本『兵庫築島伝』及び合巻『昔語兵庫之築島』をめぐる―』『国文学研究』第八十二集所収 一九八四年三月）が指摘されておられることを紹介しておく。

最後になりましたが、五回にわたる連載に対して、多大なるご理解を賜りました関西学院大学日本文学会ならびに関西学院大学図書館、また稿を成すにあたり、御指摘・御教示いただきました全ての皆様に、感謝申し上げます。
（高瀬）

（もりた まさや・関西学院大学文学部教授）
（たかせ まひと・関西学院大学大学院
文学研究科博士課程後期課程）